



球磨郡錦村一武栄開拓地の記録

私たちはこう闘った

はじめに

開拓地といつてもさまざまな風貌をもつているものだ。米や麦や甘藷などを中心に、家畜や園芸を営んでいるもの、逆に果樹や家畜に主力をおいてやつているところなどと、それぞれその開拓地の立地条件にあつた営農型態が生まれている。そして入植当時の条件がみなそれぞれに異なるように、現在までの足どりもみなみではないようである。いま県下に一六八の開拓農協が点在しているが、昭和二十二年の初入植から十二年、どうやら開拓農も軌道にのつた感はあるもの、いまだに悪条件と斗つている開拓地が少なくないようだ。生活実態をおおまかに分けてみると、どうやら既存農家なみになつたもの二〇%、まだ少し振わないもの六〇%、そして立地条件にめぐまれない

ために比較的不振なところが二〇%という具合になる。立地条件が悪いところでは、例えば地質や気象条件が極端にわるいとか、場所が辺鄙なために水や交通の便が思わしくないとかいろいろの障害の多いところである。こういつた不振地区に対しては、いま県では、特にその実態に即した営農指導と、道路や、水や、施設の導入に力こぶを入れて早急な解決に乘出している。だが一方、ひどい悪条件と取組みながらも、これをどうにか克服し、汗まみれの顔にホッと一息入れている開拓地の姿が多くみられる。いわば開拓十二年目にする希望ある横顔でもあろう。そして、こゝに紹介する球磨郡錦村一武栄開拓地こそは、すべての開拓者が経験したついでと苦しみを象徴しながら、その幾多の試練に耐えぬいてきた不屈な記録の姿だと

もいえよう。

ある日の開拓地

青い山々に囲まれた傾斜の多い平地。桃の木と煙草の畝を縫つて、陸稲の棟が続く。木々の間には点々と農家の屋根がのぞいている。この開拓地の唯一の広場ともいえる精米所前の庭では今日もボールが快くよく大空に半円を描く。ドットとあがる歓声。今日は月に一度の楽しい農休日なのだ。この頃では婦人会でもバドミントンをはじめた。隣部落からの他流試合も多くなつた。多農休日をもう一日ふやそうという声も強い。ともかくも開拓地という感じとはおおよそ程遠い雰囲気だ。組合長の武田竹次さんは多この明るさと希望は、自分たちの素手をつかんだ唯一のものですくも感懐ぶかげにこれまで歩んできた十二年の苦斗を語られる。

ローソクの光を囲んで

昭和二十二年に入植した当時この一帯は全くの原野だつた。ぬきぎと灌木と茅ばかりの地帯に二十四戸の笹小屋が建てられた。毎日のように、猪につくりたてた形ばかりの芋畑を容赦なく喰荒らされたり、野兎が



一武栄に2.

家の中に飛込んだりした。入植者八五名の中、半数以上が農業の未経験者だつたから出発から大変だつた。ローソクの光を囲んで毎晩のように寄合いが開かれた。それは作付技術の討論の場でもあつた。この話合いは一武栄開拓農協の方向についての基本的な態度と計画がくり返し確認されていった。武田さんの話では、入植当初の基本的な計画として、

- ▼一人の脱落者も出さない。協和と団結をはかる。
- ▼笹小屋式生活では駄目だから一日も早く住宅を確保しよう。
- ▼電灯を早く導入しよう。
- ▼水の問題を早急に解決しよう。

資金は計画的に

初め八五名だつたのが開拓地二世ができて、現在二〇名にもなつた。この間一人の脱落者も出さなかつた。住宅計画は順調にはかどり、二十四年の秋には住宅資金を借りて二十四戸の本建築ができ上つた。さらに待望の電灯も同じ年に導入することができた。これには村の協力が多分にあつた。例えば、住宅の建築資材には村有林を伐り出して補助して貰つている。

次に営農計画だが、この開拓地は耕地面積三六ヘクタールで採草地が一・五ヘクタール。入植当時は、あんなところを開墾して何ができるのかと隣部落の人たちは嘲り笑つた。だが、すべてが必死だつた開拓地の面々は、それらに耳を貸す暇もなく、武田さんを中心にまず営農

計画と取組んだ。

失敗したラミー加工

ここで初期の計画を振り返ると、まず各住宅の囲りに一ヘクタールづつ耕地を確保しながら、別に二キロ離れた三平松に十二ヘクタールの共同作業地をつくることだつた。そして、この共同作業地には茶とラミーを栽培することにした。同時に家畜導入資金を借入れ家畜を導入することとラミー加工のための剥皮工場を設置することだつた。これらは、現金収入をはかるための最良の計画でもあつた。だが予想に反して繊維界不況のあふりをうけてラミー加工の夢は失敗に期した。これは資金に弱い開拓地にとっては致命的打撃だつた。ところで二十四年にどうにか導入した三頭のあか牛は一応成功して、二十七年には二十三頭にまでふえた。家畜導入によつて地方の倍養に益するところは大きかつた。一般作付としては、主食確保のための陸稲、甘藷、現金収入としてそ菜、果樹、煙草が取上げられたが、これらはいま軌道にのつた。失敗したラミー工場は一はやく精米所に切換えたが、これは成功して、近隣の部落からの加工依頼も多くなつた。

どうにか計画営農に成功

現在では、陸稲約十ヘクタール、甘藷九ヘクタール、煙草一ヘクタール、夏作として西瓜、さつと芋、がつくられている。家畜飼料として別に燕麦十二ヘクタール、青刈飼料各戸あて三ヘクタールというなかなかの意欲ぶりを示している。家畜では、乳牛三十二頭(二十七年にあか牛を乳牛に切換えた)役牛三頭、山羊豚などである。その中、乳牛は最も期待をかけられており、将来は各戸当り四頭までにはふやしたいという計画だ。目下



農休日のレクリエーション

る全面深耕もやつてい。ある組合員は多もう五〇万や百万の金で買つていつたつて決して手離せるもんぢやない多と自分たちの土地に対する愛着を強く感じている。さらに三十六年頃の予定だが、待望の球磨南部利水計画によりいよいよ二本の水路が、この開拓地を通るので、畑地かんがいによる高度作付も一段と本格的にならうとしている。

こぎつけた幸福の分岐点

では、この開拓地の暮しをのぞいて

てみることにしよう。一口にいえば、どうやら苦難の時期を乗り越えて、これからが楽しみだといつていいれば幸福の分岐点に立っているようだ。開拓地が一番苦しみが入植してから四、五年で、六年目が峠となつてい。というのは、一つは償還金の率が軽くなつていくからだ。最初は借入れた資金があるから安心だが、十五年間の年賦償還でいざ年間四一五万の現金を手離すことは大変である。この開拓地の場合、昨年度の七万円(各戸)が最高で、今年度からはだんだん安くなつて行くので気分的にも相当楽になつたといつていい。組合員の中には、さやかながらも貯蓄をする人がでてきて、入植して間もない頃、亡くなつた最初の犠牲者の葬儀費がなく涙も出なかつたことや、電灯料が納められなくて電線を切られた、寒い冬の夜の思い出など、今では懐かしい語り草になつてしまつた。

欲しい水と指導者

いま、この開拓地で一番欲しいものは水と指導者だとい。毎年のようにきまつて、見舞われる早はつと水不足。水が欲しい。これは多年の念願でもあつたのだ。開拓地内に三つしかない井戸ではおよそ人と家畜は賄えない。しかも酪農を伸ばして行くためには、まず水の問題が先決である。だが、その悩みも今年はどうやら解決されそうである。近くの水源から簡易水道を引く計画ができたから

次に指導者の問題だが、これは畜産とか園芸とか家畜保健などの専門的な指導をもつと機会を多く与えて欲しいといふこと。現在、農林省の開拓営農指導の基準は、二〇〇戸に一人の割合で営農指導員を配置することになっている。しかし現状では、指導員も色々の問題があつて(18ページへ)